

平成15年7月22日

水産庁

独立行政法人水産総合研究センター

日本海区水産研究所

平成15年度日本海スルメイカ長期漁況予報

- 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 -

今後の来遊見通し(2003年8月~12月)

近年の高い資源水準を維持しているが、
最近5年平均を下回る(87%)

各地域の今後の来遊見通し(2003年8月~12月)

- | | |
|------------------------|-------------|
| 1. 道北・道央海域(宗谷~後志) | 近年平均より少ない |
| 2. 道南・津軽海域(渡島, 檜山, 青森) | 近年平均より少ない |
| 3. 本州北部日本海(秋田~石川) | 近年平均よりやや少ない |
| 4. 西部日本海(福井~長崎) | 近年平均並み |
| 5. 沖合域(日本海中央部) | 近年平均並み |

*近年は最近5年間

1. 本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/>), 水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)に掲載されます。
2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下のとおりです。
水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班 担当: 竹葉・狭間
住所: 〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1
電話: 03-3502-8111(内線7376) 03-3501-5098(直通)
ファックス: 03-3592-0759
電子メール: toru_hazama@nm.maff.go.jp
水産総合研究センター 日本海区水産研究所 企画連絡室
住所: 〒951-8121 新潟県新潟市水道町1丁目5939-22
電話: 025-228-0451 025-228-0536
ファックス: 025-224-09505
電子メール: fra-jki@ml.affrc.go.jp

参 加 機 関

北海道立中央水産試験場
青森県水産総合研究センター
秋田県水産振興センター
山形県水産試験場
新潟県水産海洋研究所
富山県水産試験場
石川県水産総合センター
福井県水産試験場
京都府立海洋センター
兵庫県但馬水産技術センター
鳥取県水産試験場
島根県水産試験場
山口県水産研究センター
長崎県総合水産試験場

(社) 漁業情報サービスセンター

独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所
東北区水産研究所八戸支所
日本海区水産研究所

水産庁増殖推進部漁場資源課

平成15年度 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し(2003年8月~12月)

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海(道北・道央海域、道南・津軽海域、本州北部日本海、西部日本海、沖合域)

対象漁業：主にいか釣り漁業(中型いか釣り、小型いか釣り)

対象魚群：主に秋季発生系群

1. 道北・道央海域(小型いか釣り)

- (1) 来遊量：近年平均より少ない
- (2) 漁期・漁場：期間を通じて低調
- (3) 魚体の大きさ：小型個体が少ない

2. 道南・津軽海域(小型いか釣り)

- (1) 来遊量：近年平均より少ない
- (2) 漁期・漁場：期間を通じて低調
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み

3. 本州北部日本海(小型いか釣り)

- (1) 来遊量：近年平均よりやや少ない
- (2) 漁期・漁場：期間を通じてやや低調
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み

4. 西部日本海(小型いか釣り)

- (1) 来遊量：近年平均並み
- (2) 漁期・漁場：10月が中心
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み

5. 沖合域(中型いか釣り)

- (1) 来遊量：近年平均並み
- (2) 漁期・漁場：7~9月の大和堆付近が中心
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み



* 道北・道央海域(宗谷~後志)、道南・津軽海域(渡島、檜山、青森県)、本州北部日本海(秋田県~石川県)、西部日本海(福井県~長崎県)、沖合域(日本海中央部)

** 近年は最近5年間

説明

1. 資源水準

日本海におけるスルメイカの分布状況は6月下旬から7月中旬にかけて実施される日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果によって把握されている。スルメイカの分布状況は各調査点のCPUE（釣り機1台1時間あたりの採集個体数）で示され、今年のスルメイカの分布密度を示すCPUEの全調査点の平均は16.88個体であった。1990年代以降、スルメイカの資源量は増加し、近年は高い水準を維持しているが、経年変化を見ると今年の調査結果でも近年の高い水準を維持していると判断される(図1)。しかし、今年の資源量は、昨年の値(25.04個体)の67%、最近5年間の平均値(19.67個体)の87%であり、今年の本日本海におけるスルメイカの資源量は、近年平均を下回っていると判断される。

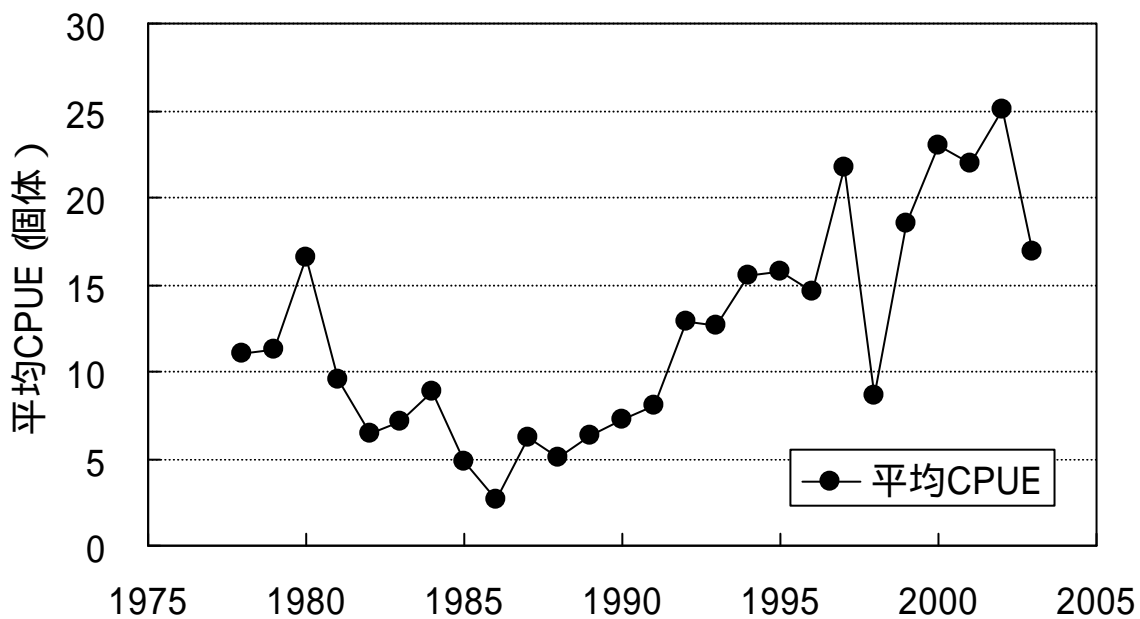


図1. 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果による資源水準の変化

2. 分布状況

2003年の日本海スルメイカ漁場一斉調査結果による分布状況を図2に示す。各海域における分布状況の特徴は以下の通りであった。

- 1) 道北・道央海域では、主に外套背長17~21cmの個体が分布し、沿岸域で高い分布密度(CPUE=50個体前後)の調査点があった。また、留萌沖の調査点では外套背長17cm未満の個体も多く採集された。
- 2) 本州北部日本海から道南の沿岸域では主に外套背長19~21cmの個体が分布し、入道崎沖で分布密度が高かった(CPUE=約50個体)。しかし、津軽海峡の西では分布密度が低い傾向(CPUE=10個体前後)にあった。
- 3) 沖合の亜寒帯前線付近(北緯40度付近)では主に平均外套背長21cm以上の個体が分布し、大和堆の東方海域で分布密度が高い海域(CPUE=20~50個体)が見られた。
- 4) 能登半島から山陰沿岸域では、平均外套背長17cm未満の小型の個体が多く分布していた。

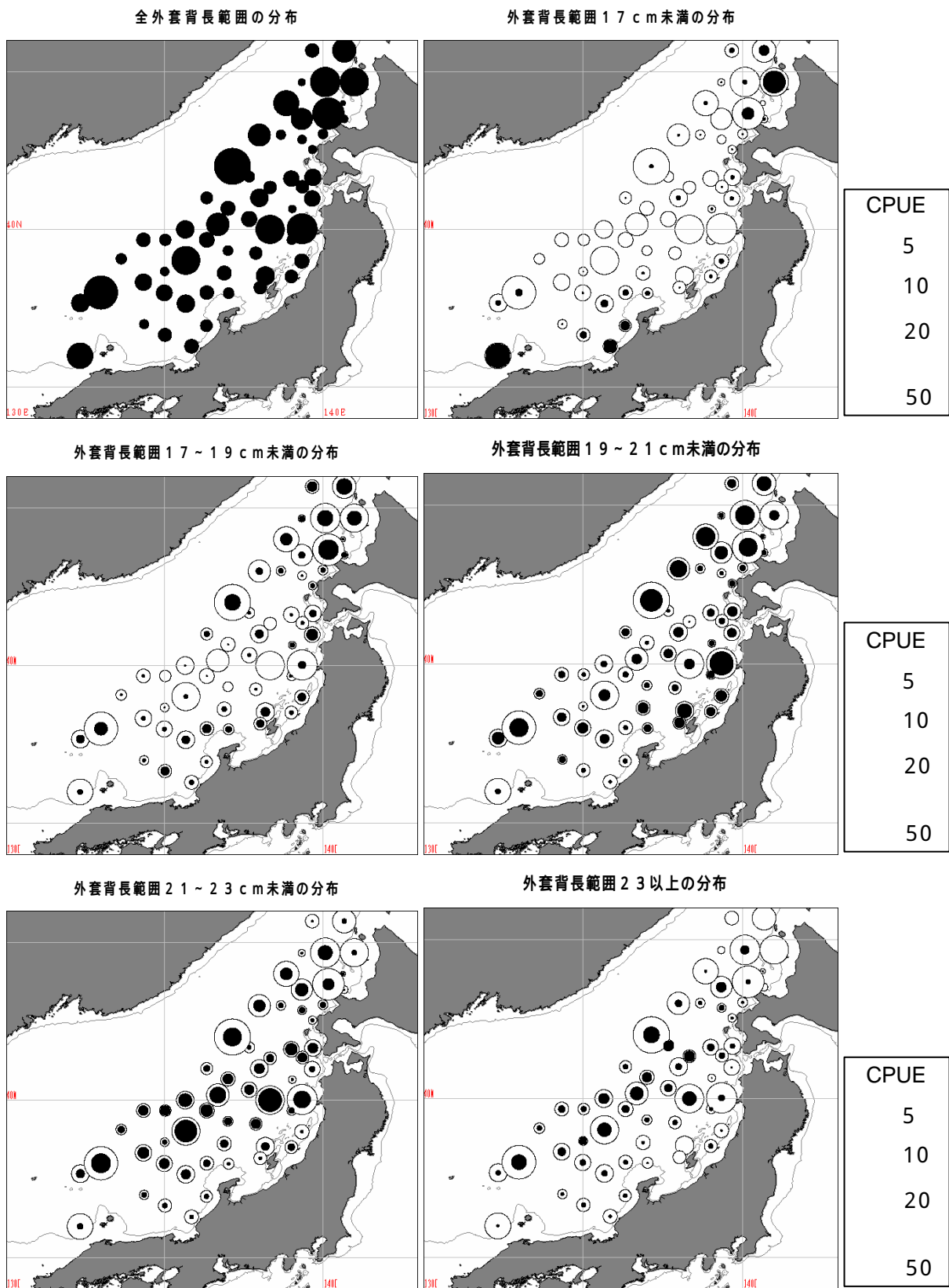


図2 . 2003年日本海スルメイカ漁場一斉調査結果による分布状況。CPUEは釣機1台1時間あたりの採集個体数。は、各外套背長階級範囲の分布密度を示す。は全体外套背長階級の分布密度を示す。

3. 魚体の大きさ

分布していた魚体の大きさを CPUE で重み付けした平均外套背長組成（各外套背長階級の釣機 1 台 1 時間あたりの平均採集個体数）を図 3 に示す。2003 年は全体としてピークが 20～21cm 台の単峰型の組成となっていた。2002 年の組成と比較すると、外套背長 16～20cm 台の個体が大きく減少していた。しかし、外套背長 21cm 以上の個体は、2002 年および近年平均とほぼ同じ分布密度となっていた。つまり、2003 年の資源量の減少は主に外套背長 21cm 未満の個体の減少によると判断することが出来る。

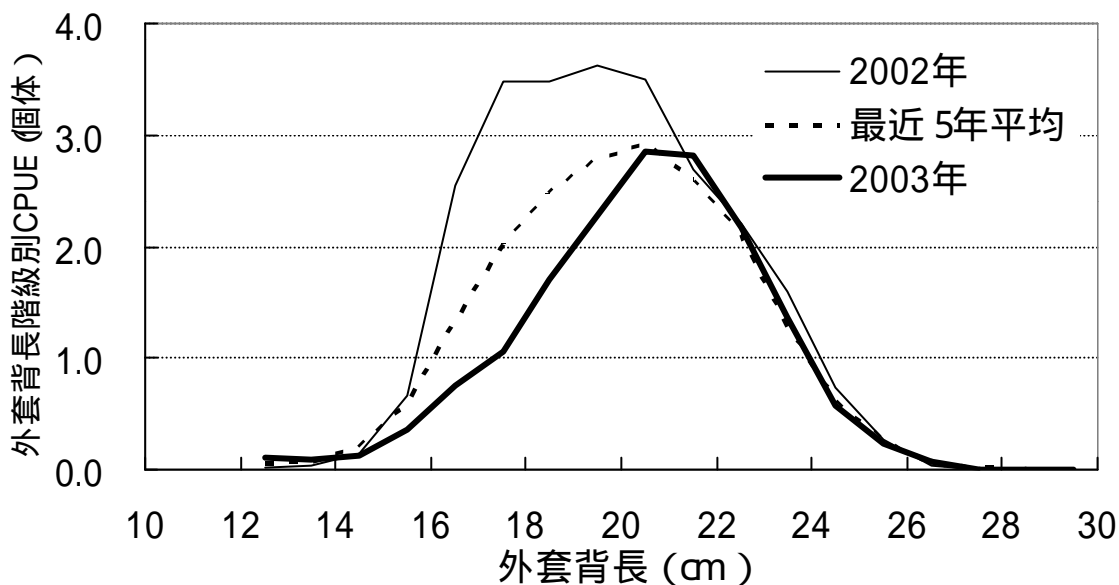


図3. 日本海漁場一斉調査結果による CPUE 重み付け平均体長組成（各外套背長階級の釣機 1 台 1 時間あたりの平均採集個体数を示す）

漁況予報

2003 年の日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、標識放流調査結果による魚群の移動状況、および冬季発生系群を主体とした太平洋での分布状況（平成 15 年度第 1 回太平洋イカ長期漁況予報）を主要な資料として今後の漁況を下記のように予測した。なお、平成 15 年度第 1 回太平洋イカ長期漁況予報によると日本海へ来遊する群が多く含まれる大畑～北海道南部海域では 1998 年を上回るが 2002 年を下回り、北海道東部～根室海峡周辺海域では 2002 年並と予想されている。

1. 道北・道央海域（小型いか釣り）

道北・道央海域では 7～8 月が漁期のピークであり、年によっては太平洋からオホーツク海経由で来遊する群によって 10～11 月にもう一つのピークが出来る場合がある。7～8 月は日本海を北上してきた群が漁獲されるが、今年の当海域および道南・津軽海域における分布密度は高くなく、初漁期の漁況も低調に推移している。また、南下期に漁獲対象となる道北海域および太平洋での分布状況も昨年を下回る状況となっている。したがって当海域の漁況は、漁期を通じて近年平均を下回り、後半にも大きなピークはないと予想される。魚体は前年に比べ小型個体が少ない見込み。

2．道南・津軽海域（小型いか釣り）

道南・津軽海域では例年7月が漁期のピークであり、年によっては太平洋からの来遊群によって10～11月にもう一つの小さなピークが出来る場合がある。今年の当海域および本州北部日本海では分布密度が高い状況は見られず、これまでの漁況も近年平均を下回る状況で経過している。また、太平洋からの来遊群も大きく期待できないため、今後も近年平均を下回る漁況で経過すると予想される。

3．本州北部日本海（小型いか釣り）

北部日本海域では漁期の中心は5～7月であり、8月以降にこの海域での活発な漁場形成は通常見られない。2003年の5～6月は近年並から平均をやや下回る漁況で経過しており、6～7月の調査結果でも分布密度がやや低い状況にあった。よって今後の漁況も近年平均をやや下回って経過すると予想される。

4．西部日本海（小型いか釣り）

予報対象期間の西部日本海では10月以降、産卵のために来遊する南下群が漁獲の主対象となる。1980年代は山陰沿岸域へ産卵群が来遊して漁獲対象となったが、近年の産卵群は沖合域を韓国東岸へ回遊するケースが多く、沖合中心の漁場形成となっている。今年の調査結果では沖合に外套背長21cm以上の個体が近年平均並に分布しており、これらが南下する10月頃には近年並みの漁況が予想される。しかし、調査結果では外套背長20cm以下の個体の分布量が少なくなっていたこと、および太平洋での資源状況が昨年以下と判断されていることから、漁期後半の11～12月は近年平均を下回ると予想される。

5．沖合域（中型いか釣り）

沖合域では大和堆を中心に7～9月を中心に漁場が形成される。今年の調査結果では、沖合の前線付近に外套背長21cm以上の個体が近年平均並みに分布しており、7～9月の大和堆付近の海域で近年平均並みの漁況が予想される。また、太平洋側での資源状況が昨年を下回っていること、および調査結果では小型個体が少なかったことから、10月以降は近年平均を下回る漁況になることが予想される。